

---

# From Dusk Till Dawn

相庭 ゆうき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

From Dusk Till Dawn

### 【ズームード】

Z0976A

### 【作者名】

相庭 ゆうき

### 【あらすじ】

ある事から絵が描けなくなつた「僕」と太陽。様々な出来事を通して彼は「朝」を迎える事ができるだろうか。

真っ白に広がる世界を前に僕は立ちすくんでいた。そこは僕に与えられた自由な世界。僕の思うように創造することができる世界。なのに僕は手を動かすことができない。少し前まで確かに見えていたものを描き出すことができない。

代わりに見えるのはその人の顔。悲哀に満ちた表情は今にも泣き出しそうに歪んでいる。けれどもその人は、決して涙を見せずに僕から背を向け何処かへ行ってしまった。

赤土の大地が、光を受けて金色に輝く。地平の先には深紅の太陽が真円を描いている。茜色、僅かに陰つたいわし雲が広がる空。左に広がる空を見る。正面に浮かぶ太陽を見る。右に広がる空を見て、ゆっくりと視線を落としていく。

黒い髪が見える。艶やかでしなやかな髪。目が合つ。透き通るようく白い顔。大きく栗色の瞳に僕の姿が映っている。その目は少し細くなつて、彼女は優しく微笑んだ。頬が夕陽を受けて紅に染まっていた。肩を超える程の髪と白く細い首。細い肩と白いワンピース。少しふくらんだ胸元。軽く曲げられて腰に引き寄せられている右足と、無造作に投げ出された左足。素足に白いサンダル。

僕たちは、岩の上に座っていた。荒野に転がる大小様々な岩石のなかでも一際大きく、正に岩と呼ぶにふさわしい。視線を泳がせて、もう一度彼女の顔を見た。彼女は、やはり微笑んでいた。

失礼しました、と言いながらドアを引く。ギイと嫌な音を立てながらドアは開き、僕は廊下に出た。窓からは夕陽が差し込んでいる。ため息を一つ、腕の時計を見てから、鞄を背負う。ゆっくりと昇降

口の向かって歩き出す。赤い光が彌り出す影は壁にもう一人の僕を描いていた。通りがかりに何気なく自分の教室を覗くと、人影が一つ見えた。見知った姿形。逆光で顔が見えなくとも、誰なのかわかる。

「太陽」僕が口を開く前に向こうが手を振った。教室に入る。オレンジに染め上げられた教室は、何処か違う世界のようで、まるで時間が止まっているようだった。反射的に見上げた時計は止まつていて、やつぱりか、とおかしな納得をしてしまった。

「太陽？」声をかけられて我に返る。

「ああ、哲平。今日は一人なんだ？」慌てて視線を巡らせながら話題を探す。それからふと浮かんできた疑問を投げかける。視線の端に移った時計は分針をガチリと揺らしていた。秒針がないから止まつてるように見えたのかと、考えれば当然の事にやつと気が付いた。「一輝は塾かずきだと。あいつ最近付き合い悪いよなー」哲平が僕に同意を求めるように、目を合わせた。曖昧に肯定するように頷く。

「哲平は？」

「これから部活に行くと」成績悪いから今まで先公に説教ぐらつてた。……進路かあ。どうしようかな俺」哲平が天井を見上げ咳いた。僕は哲平の前まで来ていた。

「哲平はサッカーに関係する仕事がやりたいって言つてたじゃん」それを聞いた哲平は肩をすくめた。

「具体的に決めろってさ」僕は冗談半分に、哲平の肩に手を乗せた。「がんばれ！未来のファンタジスター！」おう、と哲平は力強く親指を立てて、笑つた。

「太陽は絵、描かないのか？」僕は無表情になり、俯いた。

「お前が描かなくなつた理由はわかつて。でも、何度も言つよつだけど、本当にもつたといないと思うんだ。なあ……。いや、ごめん。結局はお前次第だからな。じゃあ、俺部活から行くわ」哲平は僕を見て、教室を出た。それから振り返り、努めて明るい声で僕に言った。

「また三人で遊ぼうぜ」僕は哲平とは田を合わせずに頷いた。哲平の足音が遠ざかる。

赤土の大地。光を受けて真赤に燃える。地平の果てでは沈んでいいのかわからない、と太陽が泣いていた。その上をいわし雲の大群が静かに泳いでいる。

学校を出た僕はまっすぐこの場所に来ていた。見通しのきく荒野の中一際目を引く大きな岩。その岩の象る影に同化した人影。地面に長く伸びた人影、岩陰、岩、徐々に視線を上げて僕は彼女の後ろ姿を確認する。僕は砂を踏みしめてゆっくりと歩き出す。

「おはよ。元気してた?」岩によじ登っている僕に彼女は夕陽に顔を向けたまま言った。

「まあまあ」岩を登りきり、彼女の横に座りながら僕は言葉を返した。彼女は少し口を尖らせた。

「曖昧ね。しかもあなたは嘘をついてる。ホントは

「あんまり気じゃない」頭を搔きながら僕は訂正した。彼女には嘘がつけない。

「何があつたの?」

いつの頃だつたろう。彼女と会つたのは。会話を交わすようになつたのは。

彼女は自分の事を話したがらず僕に話をせがんだ。名前すら僕は知らない。?三日月?のミカヅキだと冗談めかして笑いながら言つたことがあるが、違うだろう。それでも僕は特に深い詮索をしなかつた。

彼女は聞き上手だつた。彼女の前で、僕は驚くほど素直になれた。夢中で毎日の出来事を話した。悩みを打ち明け相談にも乗つてもらつた。

「今日は午後の授業中 担任の授業だつただけど 陽気に誘われてついうとうとしちやつたんだ。それで、チヨークを投げつた。

けられて」彼女が気遣わしげに僕を見た。

「大丈夫だつた？」

「いや、チョークは的を外れて隣の席の奴に当たつたんだけど。そのあと起こされて、怒られたんだ。放課後進路指導室に来いってね」「そんなに怒られること？」

「いや、進路指導がやりたかつたみたい。実際進路指導室では寝たことについては軽く触れられただけだし」

「じゃあ何を話したの」

「進路指導」当然だろ、と言いかけて彼女は学校に行つているのか、ふと氣になつた。僕がここに来た時彼女がいなかつたことは一度もない。毎日ここに来ているのだろうか。そういえば彼女とは夕刻にしか会つたことがない。他の時間に来ても彼女はいるのだろうか。

「太陽は、進路どうするの？」視線を外してそんなことを考えていた僕は、不意に彼女に覗き込まれて、少しのけ反つてしまつた。どうしたの、と彼女が訊ねる。

「い……いや、何でもない。進路ね。……進路か」一瞬の逡巡。そして僕は口を開いた

「正直なんにも考えてない。僕にはやりたいことも、好きなこともない」無感情に言って、顔を背けた。僕の横顔を彼女はどんな顔で見ているのだろう。痛いほどの視線を感じる。しばらくして彼女は言った。

「本当に?」僕は俯いたまま首を揺らす。

「嘘。だつてあなたには……」言葉が途切れる。何かを躊躇つているようだ。

「ごめんなさい。今日は、もう終わりね

彼女は何を言おうとしたのだろう。思い出したくないことが蘇りそうになつて僕はギュッと目を瞑り頭を振つた。彼女がそれを知っている筈がない。彼女にすら話していなかつたから。深呼吸をして顔を上げた時、彼女の姿はなかつた。

夕陽は、未だに沈まらず泣いていた。

それからしばらくしたある日。薄暗がりの道をトボトボと歩く。家へと繋がる最後の直線は気分によって長くも短くもなる。それくらいの距離だつた。今日は早く帰つて寝たかったが、その道はとても長く感じられた。そんな気分にさせる出来事が学校で起こつた。ポケットから鍵を取り出しつつ門を曲がる。そのままの流れで鍵を玄関にねじ込もうとして、僕は動きを止めた。

玄関前の人気が座つている。長い髪。艶やかでしなやかな、綺麗な髪。顔が上がる。目が合つた。大きく栗色の瞳に僕の姿が映る。

「太陽！」突然叫んで跳ね上がり、飛びついてきた。そのまま僕に体重を預けながら手を腰に回す。僕の胸に顔を埋めて、

「久しぶり。元気してた？」と言つた。

「つ……もしかして、満月？」恐る恐る僕は訊ねた。腰に回された手に一層力が込められる。当たり、と耳元で囁いてから、身体を少し離した。僕と目が合つ。

「今年からこっちの大学でね。越してきたんだ。これからよろしく改まつて手を差し出す満月。僕は混乱しながらも手を出した。ブンブンと振られる右手を見ながら、僕はやつとのことと言つた。

「聞いてないよ」

「言つてないもん。家は前の家と同じだから」左手で隣の家を指します。

「それより……大きくなつたねえ。昔は私が背え高かつたのに」頭に手を乗せ僕の方へスライドさせる。トンッと軽く、僕の胸に満月の手が当たつた。

「満月は……」手から顔を見て僕は、満月は肌黒くなつたねと言いかけた。かつての満月は、驚くほど白い肌だったはずだ。

「やっぱ南国は日差しが強くてね。でも、おかげで身体が強くなつた」僕の言わんとすることを察して満月が手をさすつた。それから、積もる話もありますが、と前置きしてから僕の顔を見て言った。

「明日までに引っ越しの片づけを済まさないといけないから、今日は挨拶だけ」満月は歩き出す。門の方向ではなく、隣 満月の家へと続く堀へ向かっている。満月のしょととしていることに気付き改めて、満月だ、と実感した。

「後で手伝いに行くよ」堀によじ登つた満月はこすりを向き、ありがと、と言つて堀に向こうに消えた。

満月は、僕の一つ年上の幼なじみ。身体が弱く、入院する事も多かつたが姉代わりに色々面倒を見てもらつた。それ以上に面倒に巻き込んでもらつた。悪戯は命をかけてやるもの、と宣言して比較的身体の丈夫な僕ですら大変なことを実行して、周りに迷惑をかけた上にその後しばらくベッドで寝込む満月は今思えば相当に手がかかる子だったに違いない。病人にきついことは言えないので僕はこつひとつ怒られるのを一身に引き受けた。止めたって聞かないんだ満月の悪戯は。僕は思い出して苦笑した。僕が小学六年の時、親の転勤で鹿児島へ越していつて以来会つてないので五、六年ぶりか、と考えながら鍵穴に入れた鍵をひねり、ドアを開けた。

僕は彼女に話す。一輝のこと。哲平のこと。二人とは小学の頃からの付き合いで、親友だと僕は思つてゐるし、きっと彼らもそう思つてゐるはずだ。

一輝が塾のために試合を前にしてサッカー部を辞めると言い出したこと。サッカーは何があつても一生続けると言つていた一輝の変化に哲平は激昂した。

一輝には夢があり、それを果たすには部としてのサッカーは時間をとられすぎる。でもサッカーをやめる訳じゃない。それは変わらない。一輝はそう説明したが、哲平は納得しなかつた。

哲平にも夢がある。そのためにサッカー以外にする事があること。それはわかってる。でも高校で部としてみんなと、一輝とサッカーをやれるのはこれが最後だから、たとえ夢が叶うのが遅れても、やりたい。哲平は、一輝を裏切り者とののしり教室を出て行つた。

一輝も静かに教室を出て行つた。

そんな二人に僕は何一つ言つてやれなかつた。夢のない僕には彼らに口を出す権利はないのだと、痛感した。それが悔しくて、口惜しくて。

沈まぬ夕陽を見ながら、そんなことを話した。彼女はずつと、前を見ていた。

夕陽は厚い雲の間から微かな光を送つていた。いつもよりも闇が深い。

「だつたら、探せばいい」黙つて僕の話を聞いていた彼女は静かに口を開いた。夕闇が彼女を包んで離そとしない。側にいるはずなのになんだかかすんで見えた。

「……わからないんだ。僕には彼らみたいに熱中出来る物がある訳じゃない。なんとなく勉強して、遊んで、それだけ」僕は呻いた。

「あなたはあなたが思うことをやればいいの」彼女は言つた。静かに、しかし強い口調で。

「それがないんだ」僕は目を逸らして言つた。

「だつたら探すの。あなたが彼らと対等に親友であるためにはそれが必要なんでしょう？それに先生にだつて言われたんでしょう？いい機会じゃない」静かな口調だが、いくばくか怒気をはらんだ声。

「……そうだね」微かだが確かに首の動き。ギュッと噛みしめた下唇。顔を上げて彼女を見て、もう一度、はつきりと言つた。

「やつてみるよ」彼女は優しく微笑んだ。

一層深くなる闇に彼女が呑み込まれそうになる。そのまま消えてなくなりそうな、そんな気がした。

彼女は少しだけ僕に顔を近づけて、右手で僕の頬にそつと触れた。その顔はかつての満月に似ているような気がした。

「思い出して。あなたはあるはず あつたはず」

彼女の言いたいことはわかる。なぜ彼女がそれを知っているのかはこの際どうでもいい。ただ、それでも、僕にはその選択肢を選ぶ気にはなれなかつた。

僕は瞳を閉じた。

目を覚ますと天井が見えた。ゆっくりと起きあがる。自宅のベッド。時計を見る。いつの間にか寝てしまっていたようだ。満月の引っ越しを手伝つと言つたことを思い出して、慌てて立ち上がる。私服に着替えて家を出る。塀を超えてチャイムを鳴らす。満月が出るまでの間。やけに明るいと見上げた空に金色の月が、まるく浮かんでいた。

「おはよ。入つて入つて、今いところだから」それだけ言つてまたドタドタと階段を駆け上がつていった。

昔から満月はどんな時の挨拶もおはよ、だった。

今はよくなつていいようだが、かつて満月は病気だつた。夜には必ずと言つていいほど発作が起きた。朝頃収まって、日中は割と安定していた。朝が好きなのだ、と満月は言つていた。さつといつでも朝の気分でいたいのだろう、と僕は思つた。

僕は階段を上がつていった。

満月はアルバムを見ていた。一向に部屋が片づいてる気配はない。おそらく片づけようと始めた段ボールの中に入つていたのがそれだつたのだろう。僕はため息をついて言つた。

「片づけは

「かたいこといいなさんな」そう言つて満月は僕を手招きした。

僕はため息を一つついて、ゆっくりと満月の隣に腰を下ろした。

[写真には僕と満月が写っていた。白いワンピースを着た満月が僕と肩を組んで笑っている。僕も満月も泥だらけだ。アスレチックのある公園に遊びに行つたものだらう。普通に遊ぶのでは面白くないとわざと柵の上をコースにしたりしては落っこちていたような気がする。よくけがをしなかつた、と今更ながらに思つた。満月はたまに外で遊ばしてもらえるといつもの三倍くらいはしゃいでいた。白いワンピースに白いサンダルは満月お気に入りのファッションで、

元々は病弱なまでの白い肌を目立たせないための配慮だつたらしい。隣の満月を見る。黒いTシャツに紺のジーパン。見るからに、とうほどではないが、純白に身を包めばさすがに軽めに焼かれた肌が目立つかもしない。嬉しい変化だ。

次の写真では二人は泣きはらした顔でホットケーキを食べていた。前の晩に調子が悪かつた満月が朝になつて、元気になつたと勝手に僕の家に遊びに来たのだ。正門を通ると一階の親の部屋から見えてしまうとの理由から満月は脱走にこの壙を使つた。それからは普通に遊ぶ時にもこの壙づたいにくるようになった。近道だし、スリルがあるからと満月は嬉しそうに語つた。この写真は僕の親づたいに満月の親に脱走がばれてこつぴどく叱られた後だろう。撮つてくれたのは満月のお父さんで、彼は昔から写真を撮るのが好きだつた。激しく怒つた後の満月のお母さんをなだめながら、僕らにホットケーキをふるまい、ブツブツ文句を言う妻を尻目に楽しそうにシャッターを切る満月のお父さんの姿が印象的だつた。僕は彼が大好きだつた。今も全く変わってないよ、と大げさにため息をつく満月に、同情を含めた笑いを送りながら、内心なんとなくホツとしていた。川の土手から山に沈む夕陽を撮つた風景写真が隅に貼られていた。「子供の頃夕方が嫌いだつた」僕は呟いた。

「私も。でも私とは理由が少し違うかな?」満月が応える。

「寂しかつた。友達と遊んでても、世界がこの色に塗られたら、別れなくちゃいけないから。今でも夕陽を見ると毎日友達と遊べて、他に気にすることがなく遊び回つてた頃を思い出すよ。子供時代といえба夕方だ」

「そうだよね。遊び終わつたらその日は終わりつて感じで。もう明日まで待てない、みたいな」満月の声のトーンが暗くなる。口には出さなかつたが、心の中ではこう続けているだらう。

夜が、来るしね。

こんな話をするべきじやなかつた。僕は少し後悔した。  
ページをめくる。

そこには写真ではなく絵が貼られていた。風景画。色鉛筆やクレヨン、水彩など多種の画材によつて描かれたそれらの絵は、自分で言つのも何だが、よくできていると思う。

そう、これは僕がかつて描いた物だつた。決して見たままの風景をそのまま切り取つたような絵ではないが、その場所の情感、受けた感動がよく伝わるとみんなに言われた。僕自身、そうありたいと云ふ思いを込めて描いたと自信を持つて言える。

「懐かしいなあ。太陽の風景画。久しぶりに見るよ。すつごく上手だよね」フィルム越しに絵の輪郭を人差し指でなぞりながら満月は言う。先ほどとは違い、明るい声。無理している様子もない。僕はホッとしながら、少しだけ身体が緊張するのを感じた。

「たしか私が、すつごく楽しみにしてた遠足に行けなくなつちゃつて、泣きじやくつてたのを見た太陽が、代わりに見てくるつて。写真でいいのに、わざわざ絵を描いてくれて。それが最初だつた二枚目の絵も同様になぞり続ける。

「その前から太陽は絵を描いてたよね。何だつけてアニメかなんかのポスターを模写したりしてた」右のページに飛んで三枚目。僕は拳に流れる汗を握りつぶした。

「で、色んな場所の絵を私のために描いてくれるよつになつて。すぐ、嬉しかつた。今も描いてる?また、見せてね」四枚目もなぞり終え、ページをめくろうと動かした手が止まる。

「そつういえば太陽は風景画もうまいけど似顔絵はもつとうまかつたよね」緊張が隠しきれなくなる。満月に伝わつたのだろう。こちらを見ついている。僕は俯いたまま何も言わない。視線をなるべく遠ざけようと隣の段ボールを流し見た。『台所用品』とマジックインキで書かれている。

「もしかして、まだあの事……」少しだけためらいがちに満月が訊ねる。

反応しないつもりだった。が、しかし、俯いてさらに満月の視線から逃げようと首が微かに動いてしまう。ただの友達なら、あるいは

は見逃してしまったような小さな動作だった。しかし満月にはそれで十分すぎるほどに伝わっただろう。そんな関係が少しだけ、うらめしかつた。

時計の秒針が時を刻む音が部屋に響いていた。

「……片づけ、しよつか」アルバムを閉じる音。立ち上がる気配。段ボールに手がかけられ、ガムテープをちぎり箱が開けられる。あわただしく歩き回る足音。さらに数分経つてからようやく僕はのろのろと、緩慢な動作で立ち上がり、動き始めた。

小学六年生。卒業を間近に控えた頃。僕には好きな人がいた。

その人は頭がよく、運動神経も秀でていた。誰にでも優しく声をかけ、クラスの中心であり、人気者と呼ぶにふさわしい。おまけに美人であった。誰の目から見ても、一際目を引く容姿。僕の目もまた例外に漏れず、その人を魅力的な人物と見ていた。

今思えば、ただの憧れだったのかもしれない。当時だつてほとんど憧れ以外の気持ちはなかつたはずだ。しかし、ちょっとしたことで氣落ちしていた僕に優しく声をかけてくれた時 それが彼女にとつて至極当然の行為であつたとしても 僕の中で何かのスイッチが入つてしまつたのだろう。

その頃の僕は満月に色々と絵を描いていたため、校内でも絵の上手い奴としてのポジションを得ていた。特に似顔絵描きでは他学年からわざわざ来るような人もいるほどだつた。

クラス一の美人が僕の所に來るのも当然といえば当然であつた。僕はいつも以上に緊張しながらその人の顔を見つめた。少し照れたように笑いながら僕の目の前にいる。その顔はやっぱり美しくて、紙に写せばさぞや高尚な一枚絵になるだろう。いや、しょうと思つた。僕の目にはそう映つていた。

けれど、僕の手は、違つた。

描き終えた時、いや描いている途中からうすうす気が付いていた。なんて醜い顔なんだろう。顔の造作自体は実物とほぼ同じだし、そ

の絵が誰を表しているのかは一目瞭然な程に似ている。しかしその顔からにじみ出る印象は醜悪なそれであり、おおよそ僕の目に映る憧れの人とは異なっていた。僕は焦り、何度も描き直したが結局その印象を書き消すことが出来ず、その絵は皆の目にさらされることになってしまった。

絵を見た本人と周りから覗き込んだ人達の、驚愕の顔は今でも鮮明に覚えている。その表情は誰かがポツンと言つた言葉によつて崩される。

そつくりじやん。

やつぱり？ そう思つ？ 実は私も……。なんていうか、そつくりくるよね。

そんな会話が本人の前でひつそりと、しかしさつきりと流れいく。

僕は悲しくなつた。僕の描いた絵によつて僕が皆の罵倒を受け、憧れの人々に嫌われることになるのは、覚悟していた。それが普通だと思っていたからだ。しかし現実には僕の絵は受け入れられ、その人が昔からその絵の表すような人物であつたことを再確認するような流れになつていて。

僕は悲しくなつた。僕の憧れの人々が、僕の描いた絵によつて、かなしみに顔を歪めている。こんな事は初めてだつた。

僕が冗談にしてしまえばよかつたのかもしね。弁護の言葉があればあるいは。しかし僕には何も言うことができなかつた。

足下にパサリと絵が落ちた。息の詰まる空氣の中その人は立ち上がり教室を出て行つた。そして、戻つてくることはなかつた。誰かが落ちた絵を拾い、その人の鞄に入れた。「現実を見せるためにね」その言葉には以前あつたはずの尊敬や憧れの情は含まれず、人を見下し笑い者にしようとする無感情な嘲笑いだけがあつた

後に聞いた話では、人の羨望の的になるために手段を選ばない人間だったという。人知れず涙を流していた人の数も少なくなかつた。表面上仲良くしていたが、嫌っていた人は多かつたという。その人

が卒業目前に引っ越ししていった後、そういう事実は明るみに出ることになった。

結局、僕の手が正しかった。しかし、それで僕の好きだった人を学校にいられなくなるほどに傷つけたという出来事は僕の心に自分の絵が誰かを傷つけるかも知れないという恐怖を生み出し、その日以来僕は描くことをやめた。描くことができなくなつた。

それから程なくして満月は鹿児島に行つた。最後まで、落ち込む僕を心配してくれた満月。手紙も何度かくれたが、僕は返信しなかつた。

そして僕は彼女に会つた。暮れなずむ世界に佇む彼女に。それは僕の心の生み出した。それは子供時代の。そして僕の？ 彼女？への。

引っ越しの手伝いというより邪魔をするように満月の家をうろろしながら僕は記憶の彼方からそんなことを引っ張り出していた。満月は片づけをなんとか終えて小型のテーブルで僕に紅茶を振る舞つてくれた。そしておもむろに一枚の絵を取り出した。

それは何枚も描いた満月の似顔絵のうち一番新しい物だつた。「あの」事件の起こる少し前に描いた奴だ。

「太陽の絵は、ただの似顔絵じゃない。その人の持つ本性までもそこに描き出す力がある。だから、太陽が私をこんな風に描いてくれて本当に嬉しかつた。病気とかで心が弱るとね、闇に呑み込まれちゃうんだよ。それはとっても恐くて、怖くて、泣きたくなつて、自分に嫌気が差して、周りの世界まで大嫌いになつていくの。そんな自分がもつともつと嫌いになつて、どんどん、どんどん深い闇の底へ吸い込まれていくような、そんな気がするの。そんなときには絵を見ると、ああ私はこんなに綺麗なんだ、こんなに綺麗に見られてるんだって勇気づけられるんだ。だから私向こうに行つてもこの絵は肌身離さず持つてた。一生大事にするよ」愛おしげにその絵を撫でながらそのまま話を続ける。

「うまく言えないけど、太陽の絵の影響力はすごいと思う。良くも悪くも。でも人を傷つけるっていうのは必ずしも悪い事じゃないと私は思う。惡意があつて傷つけるのはともかく、それがないのにその人が傷つくのは、きっと傷ついた方に何か問題があるんだよ。太陽が悪いわけじゃない。むしろそれをプラスに出来るかもしれない。それならその時は悪い影響に見えて、結局は良かつたってことになるんじゃないかな」僕には満月の言うことがよくわからなかつた。傷つけることが良いことだなんて、信じられなかつた。満月は顔を上げて、僕の目を見る。

「発作のひどい夜が続くと、ずっと夜の世界をさまよつてる気がするの。もう一度と陽は昇らないんじゃないってね。でもあなたが、あなたの絵が、教えてくれた。陽はまた昇る。何度も。……あなたが、くれたんだよ」少し間をおいて、だから、と続ける。

「だから、太陽は絵を描くべきだと思う。もっとたくさんの人々に、朝を、見せてあげて。たとえ夜をもたらしたとしても、朝は必ず来るのだから」

「一輝、会わせたい人つて……」日曜日の昼。僕は一輝に呼び出されて駅前に来ていた。「ああ、塾で偶然会つてさ。ぜひお前に会わせたかったんだ」僕の前には、憧れの人人がいた。かつての面影を残しつつ、すこし緊張したように、恥ずかしそうに、決まり悪そうに、はにかむその人は、やっぱりきれいだった。

「久しぶり。カズ君にあなたの話を聞いたの。確かにあの時はすっごく傷ついたけど、家に帰つて鞄の中に入つてた絵を見て、それから鏡をみて、反省したの。こんな風に描かれるのも無理ないことだと思って、私自分を変えようと努力したのよ」あの絵を取り出し、僕にも見えるような位置に持ち、その人はしげしげと絵を見た。

「大変だつた。最初の頃なんて普通人と話すのも怖くて。何度も何もかもが嫌になつて、鬱みたいになつたけど、そんなときはこの絵を見て自分を奮い立たせたの。あなたのおかげで私は生まれ変わ

れたのよ。ありがとう。そして「ごめんなさい。私のせいであなたを随分苦しめてしまった。何も気にしないで。結果的には良かったのだから」僕はこの時やっと満月の言つた言葉を実感の伴つた言葉として理解することが出来た。少しだけ、今なら描けるかもしれないと思った。

「ね、今の私を描いてくれない？きっとこれよりはマシな顔になるはずだから」その人は遠慮がちに訊ねた。僕は頷いた。

「でも少し待つて。その前に描きたい物があるんだ」その言葉にその人は今まで一番きれいに笑つた。

「よかつた。もう一度と描かないことに決めたんだなんて言われたら私がどうしようつて思つてたの」

それからしばらく話して、別れ際一輝が僕に話しかけた。

「哲平のことでお前に迷惑かけてゴメン。でももう決めたから。俺やっぱサッカーもしたいんだ。親は怒るだろうけど、哲平の方が恐いからな」へへへ、と照れ笑いして一輝は頭を搔いた。

赤土の大地。もはや夕陽はその光を届けるだけの力を持つていな  
い。ただ微かに地平の果てを照らすのみだ。

彼女はやはり、岩に腰掛けっていた。

「どう？見つかった？」

「そう簡単に吹っ切れるもんでもないよ。でも少しずつやろうと思う。とりあえず、今のところ」

「そう。よかつた」彼女は笑つた。でもその顔は少し寂しげに見えた。

「陽が沈んでいく。さよならだね」岩から飛び降りる。ぐるりと回り僕を見る。

「すぐに朝が来る。夜は、月と共に飛び越えてしまったから」

「またいつか夜が来る時が来るかもしれない。とても、長い夜かもしれない。でも忘れないで。陽はまた昇る。それに夜は月が輝く」

「シコリと笑つた。

世界が、やがて闇に包まれていく。  
消えゆく視界の中、彼女は言つた。

手を軽く挙げて、指を曲げ、開きながら。

バイバイ。

「太陽！ほら起きなさいって」

朝の光を受け、心地よいまどろみに身を委ねていた僕を布団(い)と投げる。

「まだ早いよ」しこたま打ちつけた腰をさすりながら時計を指さす。「私は行く時間なの！……っと、もう行かないとお！」そう言つて僕の部屋のドアを開けて、立ち止まる。振り返つて、窓の横に掛けてある物を見る。

「いいじyan」心底嬉しそうに笑つて言ひ。

満月はこつちに来て以来毎日僕を起こしに来る。僕はやれやれ、と苦笑した。

机の上のケイタイ。昨日の夜送られてきたメールが表示されっぱなしになつてている。

『来週日曜十時にいつもの場所で。メンバーも勿論いつも通り、俺、お前、一輝。遅れるなよ！ 哲平』

机の引き出しの中。新しく描いた満月の似顔絵。そこに描かれたものはまだ満月に見せるわけにはいかない。いつか僕に決心がついたらそれを見せよう。きっとそんなに遠い事ぢやない。

僕は満月が慌ただしく駆けていった後、立ち上がり満月の見た物を見る。

そこには一枚の絵が飾つてある。昨日仕上げたものだ。

夕陽と荒野の絵。そして白いワンピースを着た少女の後ろ姿。

僕は一言、バイバイと言つて階下に降りていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0976a/>

---

From Dusk Till Dawn

2010年10月8日15時22分発行